

特115

707



始





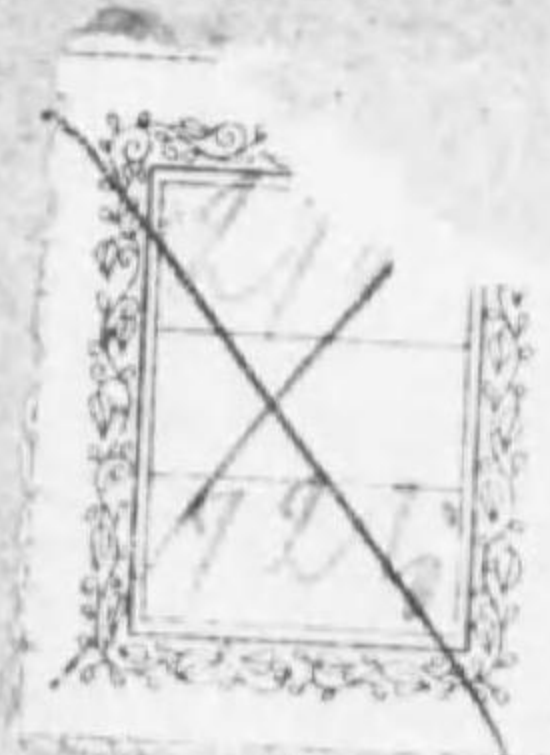
115

707

賞奇樓叢書  
第三集

蓮月式部二女和歌集

全





42115  
707  
二女和歌集解題

近世閨秀の歌人太田垣蓮月、高畑式部二女の合集なり、蓮月は絶世の美人にして亦絶世の烈婦なり、小名を誠(のぶ)と云ふ、京師智恩院の仕人太田垣傳右衛門光古の女なり、近江彦根の人近藤某を贅して夫とし、男女子四人を生みたれど皆早世し、夫も亦歿しぬ、誠時に年三十、髪を削りて尼となり、蓮月と號す然れども天然の美貌は尙ほ少年の輕佻心を惹き、慇懃を送る者多し、是に於て蓮月千斤秤を引き自ら其齒を抜く、觀る者大に驚いて烈婦なりとし、是より敢て言寄る者なし、晩年西加茂神光院の茶所に住し、陶器を製して自詠の歌を刻し、鬻いて以て生活の資と爲せり、其器其書、甚だ風致あり、都下の猾商輩往々賈造して利を射んとす、蓮月毫も意とせず、自ら往いて其製法を傳へ、且つ其器に書す、胸襟の洒落以て觀る可し、明治八年十二月十日歿す、年八十五、其神光院寺地内に葬りぬ、家集海人の刈藻、近藤芳樹これを集輯し、富岡鐵齋氏之を出版せり式部は小名とみ、大阪の町醫石井某の女、京師千種家の

正  
大 12.25  
3.

内交



醫高畑清音に嫁す、初め香川景樹に就て學び、景樹歿後、主家千種有功に従ふ、其他琵琶を綾小路有長に、笙を林廣守の父に、書を庭田從一位に、茶を速水宗匠に學び、皆其蘊奥を極め、彫刻繪畫をも亦善くせり、極めて多藝の婦人なり、明治十四年五月二十八日歿す、年九十七、東山長樂寺に葬す、家集麥の舍集あり、式部と云ふ名、及麥の舍の號は、俱に有功の得させたるなり、蓮月の眞率の中に清新の味ある式部の女流に似ず豪宕なる、實に近世の雙壁と稱す可し、この二女を合集したるは、如何なる好事者の業にかあらむ、

以上蓮月傳は、明治二十年發行好古集說に據り式部傳は、其後嗣高畑千畝氏の記（佐々木信綱氏抄録）に據る、又卷末の附録は、京師富岡氏藏板海人の刈藻より収録せり、本集雜の部蓮月の龜の歌、海人の刈藻には「寄龜祝」として「萬代と絶えぬ流れ」とあり、暫く本集に従ふ、

## 二女和歌集

春

霞

立つ日よりのごかになりて世の中をよそに隔つる春霞かな

小田垣蓮月

霞中柳

青やぎの絲こそ長くなりにつれ野邊の霞にたなびかれつゝ

梅屋

うぐひすの妻や籠るとゆかしきは梅咲きかこむ庵の八重垣

隣梅

となりには梅咲きけりなこに籠めしわが鶯を放ちやらばや

歸雁



梅が香に枕も取らで更くる夜の空に鳴き行く春のかりがね

櫻

あすも来て見んと思へば家づとに手折るも惜しき山櫻ばな

古寺花

たづねこし櫻は雪とふるでらの滋賀山でらの春のゆふぐれ

山霞

佐保姫の遠山まゆのうすがすみ春のよそほひ引そめてげり

松上霞

さゝなみに末むすばれて滋賀の浦の松にたなびく夕霞かな

野外霞

吳竹のふしみの野邊の夕霞なびくすゑまでのごけかりけり

翫梅

かざしもて往けば頭にかつちりて梅の姿になりにけるかな

山家鶯

のがれすむ身の友なるや都邊をよそにみ山の窓のうぐひす

名所鶯

春ふかみ聲もひとふしそひにけり竹田の原のうぐひすの聲

春雨

梅が枝のしづくばかりは香り来てふるとも見えぬ軒の春雨

山吹

とめゆけば八重山吹の花かげにこがね流るゝ井手のたま川

早蕨

紫の塵つくばかり袖垂れて折るや乙女の野邊のさわらび

花の頃旅に在て



宿借さぬ人のつらさをなさけにてねばろ月夜の花の下ふし

野の宮にて

の宮のはるのたむけのしらゆふは柳にまじる櫻なりけり

春雨

つれづれとさびしきもの嬉しきは花待つ頃の春雨のそら

春月

有明のかすみにむかふあさもよしきさらぎ頃の夕月もよし

三月三日

このとにけふ咲く花は幾春をもよろこびの初なるらん

落花

ゆくはるにたちおくれじの心にて散るかをしほの山櫻ばな

古寺暮春

今はとて春もはつせの山風にのこりかねたる花のしらくも

暮春

おく山の花のしら雪ながれ来て春のすゑ汲む川つらのやど

花時遠行

たらちねのなくての後と我ながらゆるす遠路の花の旅かな

春日鷹狩

櫻咲くかた野の御野に狩暮しおち草多きけふにもあるかな

桃

三千歳になるてふ桃のひとつだにまだ見ぬ君が御代ぞ遙けき

春盡鳥聲中

聲の中に春や往くらん呼子鳥よべとも山のかひはなくして

惜暮春

式

部



八重霞けふたちふたげ野に山の春の往くべき道もなきまで

三月盡

はかなくて彌生も蝶の夢の間の花の色香にうかれつくしつ

夏

首夏水

散花にかけし心のしがらみも夏になる瀬のたこのすゞしさ

新樹風

雲と見しさくらは跡もなつやまの青葉に薫る風のすゞしさ

初時鳥

いつとなき常磐の里はほととぎす忍ぶ初音に卯月をぞ知る

曉時鳥

ほととぎす今ひとこゑと待ちし間に白みはてたる有明の月

月前時鳥

ひと聲は忍びかねてや漏すらむ月もかたふく山ほととぎす

かせ山にて

日は暮れぬやどかせやまの杜鵑あすは都につれていなまし

夏山家

世の中に夏は流れていでつらむひとりすゞしき山のした水

故郷時鳥

思ふどち行て聴かましいそのかみふるき都に鳴ほととぎす

待三時鳥

曉の鳥は八こゑも啼くものをひと聲惜しむほととぎすかな

南北時鳥

ほととぎす阿彌陀が峯とよし水の聲きゝわけん歌のなか山



葵

そのかみのみあれかしこみ葵草よろづよかけてかざす宮人

夕早苗

夕づきの影に小すげの笠ぬきてのこるわさなへ植渡すらし

鶉川

深き夜の罪をかさねてこもまくら高瀬の淀に鶉舟さすらん

山牡丹

かほよばなねふる小蝶の夢の間にはつかはすぎの山陰の庵

夏旅

つらら子のふたゝび踰てとはましや木曾路の宿の夕顔のもと

夏朝

うちむかふ鏡のかげに露散りて朝風すゞし窓のむらたけ

閑居蚊遣

世をへだつ竹の林のわが庵はゆふべともなくたつる蚊遣火

夏獸

水飼ひし駒のたつ髪みだれ髪みだれてすゞし加茂のゆふ川

雨中螢

ふる雨にぬれく燃ゆる螢こそなにの過世の思ひなるらめ

扇

たが世にか扇に風ををりいれてとれば袂のすゞしかるらん

秋

月あかき夜虫を聴きて

山里の壁の荒間のきりくぐす月もこゝよりさせよとぞ鳴く

秋の夜のすさび

蓮

月



野に山にうかれくゝてかへるさを聞までたくる秋の夜の月  
よなくくの月に野守となりはてゝ馴るゝ尾ばなの袖枕かな

閑居月

身ひとつの外に限なすものもなし月さしいるゝ淺茅生の宿

海上月

言の葉の玉ひろはゞや秋の夜の月にあかしの浦づたひして

菊露

たなそこを受けて待間も千代や經ん飲ばわかゆときくの下露

菊

白菊の枕に近くかをる夜は夢もいく世の秋かへぬらむ  
摘毎にわかゆときくの花の數重ねていとゞ身の老にけん

田中霧

小山田の霧の中道ふみわけて人くと見しはかゝしなりけり

初秋露

なつ衣まだぬぎやらぬ袖のうへにむすびそめたる秋の白露

故郷月

すみすてしわが古里の秋こへは尾花まねきて月ぞすみける

深夜擣衣

うばたまの夢もつゞりの小夜衣うつやうつゝの響なるらむ

紅葉遍

たつ田姫心つくしのからにしき染めぬかたなき敷島がはら

月照三紅葉一

からにしきかけてよるさへ鏡山月のてらせる秋のもみぢば

冬

式

部



冬山家

夜嵐のつらさのはては雪となりておきて楳柵焚く冬の山里  
千柿の軒にやせゆく山ざとの夜あらし寒くなりけるかな

冬閑居

夕ぐれは寐に來ん鳥を待たれけりこがらし寒き山影のいほ

海の雪を見て

たちかへり難波すが笠きても見ん雪おもしろきあはぢ島山

松雪

夜あらしも埋もれはてゝしらごりの鳥羽山松につもる白雪

雪

かれのこる畑の綿木につむ雪を消えずは取て絲にひかまし

水上霰

舟ばたに風のつぶてとうちつけて水には輕き玉あられかな

老後の年のくれに

幾つ寐て春ぞと折しおよびより身のかゝまれる年の暮かな

殘菊薰<sub>レ</sub>袖

とりいでゝ菊の香しめん古ごろも秋なが月の長きかたみよ

山時雨

神無月しぐるゝころは春日山三笠もあだの名にぞありける

海雪

あづさゆみ磯邊をしなみふる雪に花咲きつゞく和歌の浦松

閑中霰

しづけさをこゝろと結ぶ草の屋は霰も音をしのびつゝふる

冬祝

蓮

二

月

式

部



あふさかの關の岩角ふみならしみつぎたえせぬ東人のこま  
雪中遠情

雪のうへにおもへば遠き田子の浦富士も心のうちに浮べり  
歳暮

こゆるぎのいそしく年は暮にけり蜃の眞手かた暇なみ間に  
戀

戀の歌の中に  
いつかたに心引かれてかへるらむまだ宵の間の弓張のつき

寄<sub>レ</sub>車戀  
うき人をおもひかけひの水車くるしき浪のうちもたゆまで

寄<sub>レ</sub>笛戀  
本末のしらべもゆたにふえ竹のあひにあふよの節を頼まむ

寄<sub>レ</sub>里戀  
うき人に思ひ亂れてみちのくのしのぶの里に年ぞ經にける

顯戀  
つゝめども袖より漏れてわが涙名取の川にながれいでけり

被<sub>レ</sub>厭賤戀  
八重雲に隔てらるつゝ數ならぬみをしる雨に袖ぞ朽ちぬる

春戀  
春日野の雪間の草のはつかにも見ずは戀しと思はましやは

冬戀  
人知れず心にたふるこひぐさは冬來ても猶しげりまされり

雜  
山家

蓮  
月

蓮  
式  
部  
月



山里は松の聲のみきゝなれて風吹かぬ日はさびしかりけり  
思ふ事を

よしや世に流れて渡るみづからも濁らぬ方にすまんどぞ思ふ  
かたちこそ曲りて見ゆれ山がつの心と鎌はとぎすましたり

閑居松風

世の塵をよそにはらひて行末の千代をしめたる宿の松かせ

松上鶴

軒近き松にすごもる鶴の子のひとつゝに千代やかぞへむ

龜

よろづよも絶えぬ流れにしめつらんその龜の尾の山の下水

竹

この君はめでたきふしを重ねつゝ末の代ながき例なりけり

川

こゝを瀬とさきそひわたりし武士の名に流れたる宇治の川水

山

いちじるき神のみいづの雄徳山しらべもたかき峯の松かせ

竹

ものゝふのみぎりにうゑん弓になれ矢になれ千代の竹の一村

松延<sub>レ</sub>齡

君が代もわが世もともにさきはえん遠き千歳を松に契りて

嶺上雲

雪にそひ花にむかひてかつらぎや月にさはらぬ峯のしら雲



附 録

一八

大佛のほごりに夏をむすびける折 蓮 月

嘉永四つの年卯月ばかり、夏をむすぶとかいひて、世の尼たちのとりわき行ひ給ふを、例の人まねせんとて、いとかりそめに思ひたちて、ねんずの具のみ袋やうのものにとりいれて、手づからたひもて、東山なる律師のすみ給ふ御寺のかたはらにものしぬ、こゝはあみだが峯の麓にて、五十路餘りむかし、軻遇土の神のあらびに、いみじかりし佛は焼け給ひぬれど、なほ蓮華王院のみぞ残りける、そのかたへに大きやかなる鐘などありて、今はいとふりぬる儘にいとゞ由ありげに見ゆ、後の白川の院のおほん墓も、この上にたはしまして、世に御影堂とぞいふめる、何となくひろくとして、春秋の木だち草花なども、おのがじゝ心もおかで咲き亂れたるけしき、いみじうあはれに見捨てがたき處のさまなりけり、明暮れ佛のお前に念佛申しなごして、いと静かに嬉しければ、

この頃を問ふ人あらば山寺にうしろ安くてありといはまし

若葉さしそふ夏山の景色いと涼しく、時鳥もしばく鳴きければ、

後の世をかけよくと聞ゆなり阿彌陀が峯に啼ほとゞぎす

こゝの律師は比叡の坂本に行ひ給ふ事のありて、まうで給ひぬ、おはさぬ程はいとゞ人目稀にて、廣らかなる所に唯ひとり明し暮すほごに、ある日あからさまに立ちいで、夕さり歸りて厨のかたを見つれば、この日頃目馴れぬ釜ひとつ出できたり、怪しういかならんと心に驚きて、かゝるふるき處には、狸といふもの釜に化けてものなどいひしことを、昔をさなかりける折、人の語りしをたぞき事とのみ聞きたりしが、さることもこそ目も放たで見居たりけり、とばかりあれど猶さながらの釜なりしかば、立ちよりて打ち試みなどしつれど、化けたるものとも思はれねばさてたきつ、夜もすがら今もや踊りいづるとうしろめたくて、



身をすてゝ入りにし山もならばねばさすが心にかゝる釜哉

ひとりごちして伏したるに、いと年高げなる聖の、顔はふくだみていみじう色黒なるが、黒き衣を着て白銀しろがねの光ある被かぶき物をして、あら木の杖などつきてよろめきいで、よくもこの寺にこもり給ふものかな、たのれも久しう外にありて、今日なん歸り侍るを、老いにける身は迭みに世の中のことはいろはで、佛をろがむこそ能けれ、一すぢにねぶつ申し給へ、至心信樂常念我名など申すことも侍れば、唯他方本願のかたじけなき事を深く思ひ取り給へ、なほこの律師りしの歸り給は、よく問ひあきらめ給へよなど、いとねもごろに語るを、聽く／＼夜も明けぬ、黒き衣と見えしも、しろかねの被かぶきものと思ひしも、たゞそれながらこの茶釜なりけり、をかしと思ひをるに、この御寺のかなたに住むなる清七といふ男いできて、一日律師りしの君より預かり奉りし釜、昨日もてまゐりしかど、おはさゞりつればさしたきて歸りぬといふに、心もおちるぬ、

世のつねの松風ならで山寺はかまのおとさへ法のこゑなり

いとたふとくこそ、さてあるほどに律師の歸り給ひぬ、をりしも 宮の御前、春の頃より例ならずおはしけるを、この頃となりてはいとあつしう惱みわたらせ給ふとて、御もと人たちはあはてまごひ、いかにせましと何がしくれがしの醫師くしなどつごへさせ給ひて語らひ合せ、いとさま／＼心を盡し給ふ、律師りしも御修法みすほよはじめ給ふ、こゝかしこより御加持ごかじまゐり、何よくれよと到らぬ隈なく祈り申し給へど、のがれ給はぬ御宿おんすぐ世にやおはしましけん、日にけにあつしうのみなり勝り給ふにぞ、人々足も空にかけりめぐりて、神佛にわれも／＼かはり奉らんと、念じ聞こえ給ひしかども、つひに水無月九日の夜、子ばかりにやありけん、いと果敢なくならせ給ひしとぞ、御母君のたはしますと聞きつるを、いかにたもほし嘆き給ふらんと、思ひやり奉るにも、遙かなる下が下の下露の雫も消え入りぬべき心地ぞするや、すべて殿のうちの御さま明けぬ夜の闇に暮れまごひ給ふとぞ、この宮は普く御憐みの露深くわたらせ給ひしかば、



青人ぐさの末葉までも惜み奉らぬはなかりけり、まことや山の座主にてたはしましけるを、その御かはりに居させ給ふべき宮もたはしまさねばとて、まだ大やけには聞え上げ給はねど、さてもあらぬ習ひなれば、十六日の夜この後の山に忍びてをさめ奉り給ふ、いと暑き頃ほひながら、かゝるをりは何事の上もすゝろに身にしむ心地して汗だにいであはず、宵の程はさやけかりしも、一むら雲にれもかくれて、木の下闇のおぼつかなきは、月だに心を悼ましむるならんかしと覺ゆるや、松の火影はかげほのかにて、くだち行く夜の景色いひしらすあはれに心細し、忍びやかなる御輿みこしにてたはします物を物越しに拜みまつるにも、つゞれの袖もしぼる計になんありける、いと久しうして人々歸り給ふけはひす、

夏山のしげき木かげに君をたきて心ともなく歸るわりなさ

なごや誰々も思ほすらんかし、七日七日の御營みも、また御内々なればよろづことそきたまひて、物はかなく哀にのみよそながら拜み奉るに、文月ばにのころ野分たちて、風のいとあらましかりけるあした、

白つゆの玉のたましの新むろは野分のかせも心して吹け

麓より見あぐれば、しろき御卒塔婆かいつらね、御花御香なごさゝげ奉りて、人々日毎にまうで給ふ、律師もことさらに廻向し奉り給ふ、何くれと取り集めたるあはれは盡きせぬものから、さのみはとて止めつ、秋になりゆくまゝに、芝生の小萩垣根の尾花咲きみだれ、虫のねもいとさまぐぐに鳴きかはすを、月のあかき夜などはいとゞあはれに面白ければ、こゝかしこ竹みめぐりて、

露深き草の野原となりにけりほとけのたまし名のみ残りて

古寺のこけちは跡もなかりけりよなく、毎に月はとへごも古がはらおちて苔むす草叢にこゝろながくもすめる月かなふるき世をおもひねざめの耳塚に秋のこゑ聴く萩の上かせ秋の夜も我が世もいたく傾きて入りがた近き月惜しぞ思ふ



露毎に舍れる月のかずくを數ふるほごに小夜更けにけり  
 いる月を惜むたもとのこりけり影をやごし、露のしら玉  
 よなくの月に馴行く衣手はうらなつかしき心地こそすれ  
 あはれしる心もなくて月のみは身に餘るまで眺めつるかな  
 八月十五夜、この御殿まきののうちのさまを思ひやり奉りて、  
 君なくてわろし籠たる小簾のとにありし御影を月や求めむ  
 まし、夜の月にしらべし物の音の名ごりさびしき軒の松風  
 俄に嵐のいみじう吹きいでければ、このやごりを出で、いなんとするに、朝夕目馴れ  
 し柳のもとにたちよりて、  
 世を秋にたもひすつれど露ばかり柳にかゝる我こゝろかな

大正三年十二月十五日印刷  
 大正三年十二月十八日發行

發行所

宮崎 璋 藏

印刷人

金澤 求也

印刷所

元真社

發行所

珍書會

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地

東京市麹町區紀尾井町三番地

東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地

東京市麹町區紀尾井町三番地





露毎に含れる月のかす／＼を數ふるほどに小夜更けにけり  
 いる月を惜むたもとのこりけり影をやごし、露のしら玉  
 よなくの月に馴行く衣手はうらなつかしき心地こそすれ  
 あはれしる心もなくて月のみは身に餘るまで眺めつるかな  
 八月十五夜、この御殿みどののうちのさまを思ひやり奉りて、  
 君なくてたろし籠たる小籠のこにありし御影を月や求めむ  
 まし、夜の月にしらす物ものの音の名ごりさびしき軒の松風  
 俄に嵐のいみじう吹きいでければ、このやごりを出で、いなんとするに、朝夕日馴れ  
 し柳のもとにたちよりて、  
 世を秋にたもひすつれど露ばかり柳にかゝる我こゝろかな

大正三年十二月十五日印刷  
 大正三年十二月十八日發行

校訂者 兼 發行所 東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地  
 宮崎璋藏

印刷人 東京市麴町區紀尾井町三番地  
 金澤求也

印刷所 東京市麴町區紀尾井町三番地  
 元眞社

發行所 東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地  
 珍書會





終